

「たちまち」考

大松 未奈

(丸田博之ゼミ)

現在、広島県内では「たちまち」という言葉を「とりあえず」等という意味で用いられることがある。しかし、中央語では「たちまち」を「とりあえず」という意味で用いられることはなく、「すぐに」「急に」「突然」等の意味で用いられる。以下に広島で用いられる「たちまち」の会話例を示す。

【例】①、怪我をしたときに応急手当てをして病院まで行くとき等に使われる「たちまち」

たちまちハンカチで傷口を抑えとい
て、急いで病院に行こう。

↓

とりあえずハンカチで傷口を抑えとい
て、急いで病院に行こう。

②、居酒屋などで、飲み物を決めるとき等に良く使う「たちまち」。

たちまち生ビールで。

↓

とりあえず生ビールで。

このように、広島県内では「たちまち」を「とりあえず」という意味で用いる場面がたくさんある。

執筆者は本学の授業で「方言圏論」を学習した。「方言圏論」とは周知のように柳田国男が提唱したもので、その要旨は次のようである。

「蝸牛を表す方言は、京都を中心としてデテムシ→マイマイ→カタツムリ→ツブリ→ナメクジのように日本列島を同心円状に分布する。それはこの語が歴史的に同心円の外側から内側にむかって順次変化してきたからだ」

(岩波文庫『蝸牛考』、柴田武氏の解説文による)

すなわち、現在広島で使われている「たちまち」=「とりあえず」は、古く京都から伝わったのではないかと考えられるのである。

そこで、京都における古語としての「たちまち」を調べるために『角川古語大辞典』を引いてみたところ、「たちまち」の意味は以下のようになっている。

たちまち (に) 【忽】副

①事態や状態の変化や発生が急にわかであるさま。予期や予兆の過程を経ない変化について。急に。突然。にわか。ふと。「聊、玉嶋の潭に臨みて遊覧す。忽魚釣る女子等に値ひき」〔万葉・巻五・松浦川に遊ぶ序〕「なは、たちまちにふとうち聞きつけたるほどは、親に知られずさるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなききずとおぼゆるわざなる」〔源氏。若菜上〕「独り岸の上に居たる間、忽に大なる牛深き山の奥より出来て」〔今昔・一三・二一〕

②ある事態や状態が生じたり、その状態に達したりするまでの、ある時点からの時間がきわめて短いさま。すぐに。すぐさま。即座に。「忽に急ぎ逃て行かば追て捕られなむ。然らば只然る気なくて逃げむ」〔今昔・二七・一四〕「其の御子高望王の時、始めて平の姓を給つて上総介になり給ひしより、忽に王氏を出でて人臣につらなる」〔平家・一・祇園精舎〕「はからざるに病をうけて忽ちにこの世を去らんとする時に」〔徒然・四九〕

③さしあつたって今。ごくわずかの時間をおくこともなく、事が現前しているさま。その局面において障害となるような事柄、望ましくない事柄を修飾することが多い。「汝が身は既に不浄に成

りにたり。我が身忽に不浄に非ずと云へども思へば亦不浄也」〔今昔・六・六〕「高鳳、猶世間の事を知らずして只文を学して年月を送る間に忽に夕さり食ふべき物無し」〔今昔・一〇・二五〕

上記三つの意味のうち③の意味が、おおよそ現在の広島県で使われている「たちまち」の意味と合致するのではないかと思う。そこで、③の後半に出ている今昔物語の文を詳しく調べてみた。

法師、此ノ事ヲ聞テ哀ビノ心深クシテ、亦、問給ハク、「汝ガ、家ニ有リケン時此病ヲ受テ、薬ヲ教フル人ハ無カリキヤ否ヤ」ト。病者答テ云ク、「我レ、家ニ有テ此ノ病ヲ治セシニ、不叶ザリキ。但シ、医師有テ云ク、「首ヨリ跌ニ至ルマデ膿汁ヲ吸ヒ舐レラバ、即チ愈サム」ト云ヒキ。然而モ、臭キ事難堪キニ依テ、近付ク人無シ。何況ヤ、吸ヒ舐ル事有ラムヤ」ト。法師、此レヲ聞テ涙ヲ流シテ宣ハク、「汝ガ身ハ既ニ不浄ニ成リニタリ。我が身忽ニ不浄ニ非ズト云ヘドモ、思ヘバ亦、不浄也。然レバ、同じ不浄ヲ以テ自カラ浄シト思ヒ、他ゾ穢マム、極テ愚也。然レバ、我レ、汝ガ身ヲ吸ヒ舐テ汝ガ病ヲ救ハム」ト。病者、此レヲ聞テ拵リ喜テ、身ヲ任ス。

（今昔物語 卷第六）

玄奘三蔵天竺伝法帰来語第六）

ここでの「たちまち」は、「あなたの体は既に不浄になっている。私の体はとりあえずは不浄ではないと言えるが、考えてみるとまた、不浄である。」というように、「とりあえず」と訳すことができる。また、もうひとつの用例であげられていた今昔物語でも次のようになっている。

今昔、震旦ノ漢ノ代ニ高鳳ト云フ人有ケリ。幼稚ノ時ヨリ心ニ智有テ、昼夜ニ文ヲ学シテ、更ニ他ノ思ヒ無シ。

而ルニ、高鳳、極テ家貧クシテ、妻一人ヨリ外ニ相ヒ副ヘル者無シ。然リト云ヘドモ、高鳳、猶世間ノ事ヲ不知ズシテ、只、文を学シテ年月ヲ送ル間ニ、忽ニ夕さり、可食キ物無し。

（今昔物語 卷第十）

高鳳任算洲刺史迎旧妻語第二十五）

ここでの「たちまち」も「ただただ、勉強だけをして年月を送っている間に、とりあえず今晚食べる分の食糧もなくなってしまった。」というように、「とりあえず」と訳すことができる。

そこで、この他にも「たちまち」が「とりあえず」という意味で用いられている例があるのではないかと思い調べてみた。ここでは、時代の変化と共に「たちまち」の意味がどのように変化していくのかが分かりやすいように、時代別に並べてみた。

【平安時代】

・『狭衣物語』

（原文）

よろづ思ふ様に侍る御事にこそ」と聞こゆれば、「いさや、世にあり果つまじき夢を見しかば、物のみ心細うて、さやうのことは、いかにも思ひ寄らぬを。まいて、行末までの御後見にこそ、思し召すらんに、たちまちの我身の喜びをのみ思ひて、「心ぐるしき御事もや」と、人知れず、後・ついの御事のみ、あはれにおほゆるなり。あやしくも長らへて、仕うまつり果てんこそ、本意ありても思し召されぬ。『霞まん空』の名残ばかりにや」とて、うち涙ぐみ給へる。

（巻二）

（現代語訳）

万事、理想的なご縁組でございすが」と申し上げると、「さあどうだろう。俗世に生き長らえられない夢を見たので、何となく心細くて、そういうことはどうも考えられないのだ、まして将来のご後見役とお考えだろうに、とりあえず今の自分の喜びだけ考えて、姫宮に申し訳ないことになるのではないかと、人知れず物悲しく思っているのです。いやしい官位でも長らえてお世話もうすのこそは、結婚させた意味があったとお思になるでしょう。霞む空に火葬の煙を名残に残すだけではと存ぜられます。父大臣などは、ただもう私がひねくれ者のように、おっしやいます」と言って、ふっと涙ぐんでいらっしやる。

（原文）

大將だに平らかに侍らば、誰が御ためも、行末までも、つかまつりなん。同じ御心にて、思し頼みて物し給へ」と、聞え給へば、「ただ一人の

「たちまち」考

御ゆかりよりほかに、思し扱はじ』とこそはあらめ」など、うらめしげに聞え給て、後の宮と聞えさせしは、尼にならせ給て、女院とこそは聞えさすれ、御はらからといふなるにも、いとねんごろなる御仲なれば、いかなることも、御心に任せぬやうはあるまじければ、「この人の事を、かくなん思侍る。大殿の、ゆかりには中なか思ひあつかひ侍まじけれど、年の積るままに、世の中も心細きを、「同じうは」となん思給うる。たちまちのつれづれ紛れにも、さまざま羨ましき慰めに」など、きこえ給ひければ、内裏渡らせ給ひけるついでに、「さ」など、奏せさせ給けり。

(巻三)

(現代語訳)

「大将さえ平穩無事ならば、どなたのためにも末長くご奉仕するでしょう。私と同じお気持ちで大将を頼りにしておられるがよい」と申し上げなされると、洞院の上は、「大将はただ母上一人のご縁者以外はお世話しないと思っておられるのでしょうか」と、恨めしそうに申し上げなされて、後に宮と申し上げなされたお方も、尼におなりになって、今は女院と申し上げるのだが、ご姉妹という中でも、とても親密な間柄なので、また女院は何事も御意のままにならぬことはなさそうなので、上は、「今姫君を入内させたいと思います。大臣の子ではむしろこんなに世話をする必要もないでしょうが、年を取るにつれて、老後のことも心細いので、同じことならば入内をと思っております。とりあえずの所在なさの紛らわしにも、他の北の方の羨ましさを慰めにも」などと申し上げなされたので、内裏にお越しになった折に、「かくかく」と奏上なされた。

(原文)

御使かへり参りて、『ただ今なん、うせ給ぬる』とて、ののしれ侍りつれば、御返も聞えさせて参りぬる」と申を、聞き給は、御心地、いとあへなく浅ましとも、世の常なり。「げに患ひては程経給ぬれど、『露のか(ご)とを』とあはめ給へりつるも、ただ今の事ぞかし」など、あはれにはかなき世の有様にも、いとど思し知られて、もろき涙いとどかごとがましよう漏り出でぬ。「『いとたちまち』と思急ぐ一方にしもあらず、この程は、あまたたび行き返るべき道」と、おぼしつるを、「忌

の程などは、ふとしも通はずや」と、思すも、まことにいとど、中なか心もとなくわりなし。はかなかりし花のたよりの火影より始め、昨夜のけはひのあはれなりしなども思し出でらるるに、更によそのこととおぼえたまはず、あはれにて、中將の君のもとに、細やかに訪ひきこえたまふことおろかならず。

(巻四)

(現代語訳)

お使いが帰ってきて、「あちらでは『ちょうど今お亡くなりになりました』と言って大騒ぎをしておりましたので、ご返事をご催促することもせずに帰ってまいりました」と報告するのをお聞きになるのは、なんともあつけなくあきれればかりだ、というのも一通りの言い方である。「まこと、発病以来、時が経っているが、『露のかごとを』とお答めになったのもほんの今し方のことではないかと、しみじみとはかない世の有様にもひどく無常が思い知られて、脆い涙がまるで自分のせいであるかのように漏れ出てきた。何と急な死であろうかと、気のせく縁談といことばかりでもなく、このたびは今後何度も通う道と置いていらしたのに、忌の間は仮にも通うことはできないと思うのも、本当に一度逢っただけにじれったくて理不尽なのである。はかなかった花見ついでに垣間見の火影からはじめ、夕べの気配の情緒深かったことなど思いだされると、さらさらよその事とはお思ひになれず、胸が痛んで中將の君のもとに懇ろな申問をなさること一通りでない。

・『落窪物語』

(原文)

廣くおもしろき池の鏡のやうなるに、龍頭、樂人ども、舟に乗りて遊びゐたるは、いみじうおもしろし。上達部、殿上人は、居あまるまで多かり。右の大臣殿おはしたり。かづけ物なん数知らずいりける。中宮よりも、大袿十襲、中納言よりかづけ物十襲、さまざまに奉り給ふ。宮の御達、藏人も皆物見んとてまかでぬ。中納言忽ちに御心地もやみてめでたし。日一日遊びくらしして、事はてて、夜更けてまかで給ふに、物かづけ給はぬ人なし。やんごとなきには、御贈物そへてし給へる。右の大臣殿、中納言殿に、いとかしこき馬二つ、世に

名高き箏二つ奉り給ふ。御前の人々に従ひて、物かづけ給ふ。こしざしせさせ給ふ。越前守、「此(の)事ばかりは我(が)思ふやうにせよ」とて、充て給ひければ、いとめやすくしたり。二三日ばかりとどめ奉り給ひて、渡し奉り給ひける。女君、かくし給ふ事をいとうれしと思ひ聞え給ふ。大將いとかひ有(り)とおぼす。

(巻之三)

(現代語訳)

広く趣深い池で鏡のように澄んで静かな水面に龍頭の舟を浮かべ楽人たちがその舟に乗って管弦を奏しながら座っているのは、大層風流だ。上達部や殿上人は座りきれないほど多かった。右大臣様もいらっしゃった。参集の人々が多いので、大將は来客に贈る引出物がたくさん入用なことであった。それで、妹君の中宮からも御援助として大うちかけ十襲、もとの三の君の婿である中納言様より引出物として十襲、いろいろに大將様に御援助申し上げるけれども、それを上回るほど、中宮づきの女房や女蔵人までも、皆見物しようとして、宮中を退出してこちらに来た。中納言はこの盛大な催しにたちまち御病気もなおっておめでたい。一日中、音楽を奏して暮らし、宴が終わり、夜が更けて皆がお帰りなさる時に、大將が引出物をお贈りなさらない人はいなかった。身分の高い方には引出物に贈物を添えなされた。右大臣様や中の君の中納言様には大層すぐれた駿馬二頭、世に名高い箏の琴を二振り、それぞれに一つずつを御贈呈なされた。右大臣や中納言のお供の人々には身分に応じて装束をお与えになる。それ以下の供人には、巻絹を腰差しとして下される。越前守は、大將が「この賀の引出物のことだけは自分の思い通りにしろ」と仕事を割当てなされたので、まことに穏当に遂げた。大將は中納言を二、三日ほど三条邸にお留め申しなさって後、お帰し申し上げなされた。女君は夫が父の中納言にこのようになされたことを大層嬉しいと思い、その気持ちを大將に申し上げなさる。大將は、大変やりがいがあってよかったとお思いになる。

・『蜻蛉日記』

(原文)

すなはちかい連れて来たり。おろし出だし、酒

飲みなどして、暮らしつ。中の十日のほどに、この人々、方わきて小弓のことせんとす。かたみに、いでぬなどぞ、し騒ぐ。しりへの方のかぎり、ここに集まりてならず日、女房に賭物こひたれば、さるべき物やたちまちにおぼえざりけむ、わびざれに青き紙を柳の枝にむすびつかけたり。

(中巻)

(現代語訳)

早速つれだつてやってきた。侍女たちがお供えのおさがりを出してやると、従者たちはお酒を飲んだりして、一日を過ごした。中旬に、この従者たちが、前後二組に分れて小弓の試合をすることになった。お互いに練習だなどと、騒いでいる。後手組の人たちが全員、こちらに集まって練習する日、侍女に貴品をねだったところ、適当な品物がとっさに思い浮かばなかったなだつたろうか、苦しまぎれの洒落に、青い色紙にこんな歌を書いて、柳の枝に結びつけてさし出した。

このように。平安時代では『今昔物語』以外にも「たちまち」が「とりあえず」の意味で用いられている例をいくつか見ることが出来る。

では、それ以降の時代はどうであろうか。

【鎌倉時代】

・『平家物語』

(原文)

彼暴悪を案ずるに、思慮を顧にあたはず。運天道にまかせて、身を國家になぐ。試に義兵をおこして、凶器を退んとす。しかるを鬪戦両家の陣をあはすといへ共、士卒いまだ一致の勇をえざる間、區の心おそれたる處に、今一陣旗をあぐる戦場にして、忽に三所和光の社壇を拜す。機感の純熟明かなり。凶徒誅戮疑なし。歡喜涙こぼれて、渴仰肝にそむ。就中、曾祖父前陸奥守義家朝臣、身を宗廟の氏族に歸附して、名を八幡太郎と号せしよりこのかた、門葉たる者歸敬せずといふ事なし。義仲其後胤として首を傾て年久し。

(平家物語 巻第七 願書)

(現代語訳)

かの清盛の暴悪を思うと、あれこれ思案してばかりはいられず、運を天にまかせて、一身を國家に

「たちまち」考

捧げている。義兵を起こして、凶悪な者を退けようと試みている。しかしながら、源平両家に対陣して戦闘しているにもかかわらず、兵士の間に、まだ心をつににしての戦いに臨む気が出てこない。で、まちまちの心になるのをおそれていたところに、いま一合戦をしようとしている戦場で、思いがけず八幡宮を拝した。仏神の感応が熟し、神助を得ることは明らかだ。凶徒を誅戮できること疑いがない。歓喜の涙がこぼれて、仏神のありがたさを深く心に感じている。とりわけ曾祖父の前陸奥守義家朝臣は、身を八幡大菩薩の氏子として捧げ、名を八幡太郎と名のってより現在まで、その一門に属する者で、八幡大菩薩に帰依しない者はいない。義仲はその子孫として長い間深く信を寄せている。

【室町時代】

・『御伽草子』

(原文)

「宰相殿は世にも人なきやうに、かかる御ふるまひかな。おかしき御心かな」と笑ひける程に、母上きこしめし「みなみな僂事をや申(す)らん、めのとに見せよ」との給へば、めのと見て「まことにて候」と申(し)ける。父母あきれしばしものをもたまはず。ややあつて「いかにめのと聞け。とかく宰相の君を諫め、鉢かづきに近づかぬやうに計らへ」とのたまへば、めのと若君の御前に参り何となく御物語申(し)慰めて、「いかに若君さま、まことしくは候はねども、湯殿の湯わかし鉢かづきがもとへ通はせ給ふよし、母上聞こしめして、よもさやうにはあるまじけれども、もしまことならば、父の耳に入らぬさきに鉢かづきをいだすべしとの仰せにて候」と申(し)ければ、若君のたまふやうは、「思ひまうけたる仰せかな。一樹の蔭一河の流れを汲むことも、他生の縁とこそ聞け。いにしへもさることあればこそ、主の勘当かうふり、千尋の底に沈むとも、妹背の中はさもあらず。親の御不審かうふりて、たちまち無間にしづむとも、思ふ夫婦の中ならば、何か苦しかるべきぞ。殿上の御耳の入り、たちまち御手にかかるとも、かの鉢かづき故ならば、すつる命は露塵程も惜しからず。かの人を捨てんこと思ひもよ

らず。このこと用ひ申さぬとて、鉢かづきもろともに、追ひだし給ひなば、いかなる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめゆめ悲しかるまじ」とてわが御方を御出でありて、柴積むとほそに入り給ふ。日頃は人目をつつませ給ひしが、めのと参りて申(し)てより後は、ひめもす鉢かづきがもとにこそ居給ひける。さるほどに御兄たちも一門座敷にかなふまじとありけれ共、厭ふけしきもまします。いよいよ人目をも憚らず、朝夕通はせ給ひける。

(御伽草子 鉢かづき)

(現代語訳)

「宰相殿は、世間にほかの女もないように、このようなことをなさっているよ。わけのわからないお心だな」と笑った。母上がお聞きになり、「だれもが不都合なことを申すようだが、乳母に調べさせよ」とおっしゃるので、乳母が調べて、「事実でございます」と申し上げた。父母はあきれ、しばらく何もおっしゃらず、少したってから、「なんと乳母、聞けよ。何かと宰相の君に意見して、鉢かづきに近づかないようにはからえ」とお命じになる。そこで、乳母が若君の御前に参り、それとなくお語り申しあげお心を慰めて、「なんと若君様、真実らしくはありませんが、湯殿の湯沸かし女の鉢かづきのもとへお通いなさるとか、母上がお聞きなされて、まさかそのようなことはあるまいが、もし事実ならば、父の耳に入らぬうちに鉢かづきを追い出すがよいとおことばでございます」と申したところが、若君は、「覚悟していたおことばだよ。同じ木の陰に宿り、同じ川の流れを汲むことも、前世からの縁とは聞いている。昔から、そのような因縁があるからこそ、主人の咎めをこうむり、千尋の海の底に沈むことがあっても、夫婦の仲はそんなことでは切れはしない。親のお疑いを受けて、たちまち無間地獄に沈むことがあっても、愛する夫婦の仲であれば、難の苦しみがあるろうか。ご両親のお耳に入り、たちまちご成敗をうけても、あの鉢かづきのためならば、捨てる命はほんの少しも惜しくはない。あの人を捨てることは思いもよらない。この事を承知しないとって、鉢かづきともども追い出されるならば、どのような野の果て、山の奥に住むとしても、愛する人と添えるならば、けっして悲しくはない

ろう」とおっしゃって、自分のお住まいになるところをお出になって、鉢かづきのいる柴をつんだ戸の中におはいりになる。それまでは人目をばばかっておられたが、乳母が参って申してからのは、一日中鉢かづきのもとにとどまっておられた。そこで、兄君たちも自分たち一家の座敷に来てはならないとおっしゃったが、気にかけるご様子もない。いよいよ人目をもかまわず、朝な夕なお通いなさった。

【江戸時代（初期）】

・『伊曾保物語（国字本）』

（原文）

老者の異見を軽しむる事なかれ。老いたる者は、その事、我身にほだされてなり。汝も年老い齡かさなるに従つて、其事たちまち出来すべし。

（巻之中）

（現代誤訳）

年寄りの異なった見解を軽視しないように。歳をとった者は、異なった見解を言い、教訓することを、自分の長年の経験からだまっていられない。あなたも年老い、年齢をかさねるに従い、このようなことをすぐにするようになる。

以上のことから考えると、平安時代では、「たちまち」を「すぐ」の意味だけでなく、「とりあえず」等の意味でも用いられていたが、鎌倉時代以降では「とりあえず」の意味として用いられなくなっている。

そこで、主に室町時代の京都の話し言葉が載せられている『日葡辞書（エヴォラ本）』を引いてみると、「たちまち」は次のように書かれていた。

Tachimachi. Aduer. I, Socujini.

Logo, ou em contineute, Sem duuida.

「たちまち」 副詞 すなわち「即時に」
すぐに、あるいは即刻、疑いなしに

このように、やはり室町時代の中央語である京都口語での「たちまち」の意味には、「とりあえず」

に該当するものがなかった。

そこで、室町時代語を鳥瞰する目的と、平安以前の「上代」の様子を知るために『時代別国語大辞典』を引いてみた。以下がその概要である。

・「上代編」

たちまちに【忽・忽然】（副）

突然。またたく間に。動作がきわめて短時間に行われる場合にも、またある状態や動作が突然予期しない形で起こる場合にもいう。

【考】「忽」は、漢籍の例にはゆくりなくも・たまたまの意をもつものがある。ある状態や動作が予期しない形で起こる意は、これに基づいて生じたものか。

・室町時代編

たちまち【忽】（副）

①問題とする事態の結果が、時をおかず実現するさま。

②そのことが現実のこととして、疑う余地のないさま。

これらのことから、おそらく「たちまち」の意の変化は方言圏論に当てはまるのではないかと思う。

すなわち、平安時代には中央語でも現在の広島弁と同じく、「たちまち」を「とりあえず」という意味でも用いるようになり、それが地方にも広がり広島にも伝わった。しかし、時がたち鎌倉・室町時代の時期には中央語では「たちまち」を「とりあえず」の意で用いることがなくなった。そして、地方ではそのまま「とりあえず」の意味が残り今でも広島弁で「とりあえず」の意として用いられているのではないかと思う。

また、調べていくうちに「たちまち」+「に」で用いられる場合、ほとんどが「とりあえず」の意味で訳せないことが多いということに気付いた。平安時代中期に書かれた宇津保物語には「たちまちに」がたくさん見られる。

「たちまち」考

「このわが身不孝ならば、この雪たかくふりまされ」といふ時に、いみじうたかくふる雪、たちまちにふりやみて、日いとうららかにてりて、ありしあわはいできて、れいの
いも、ところや、やきてうじてとらせてうせぬ。

みなみのやまのはなの木どもの中に、ふたつぬろう、たけよきほどにうちたからぬほどにたちまちにつくるべし。

夜いたうふけぬれば、七日の月いまはいるべきに、光たちまちにあきらかになりて、かのろうのうへとおほしきにあたりてかがやく。

わざいひはたちまちにかかるものなりけり。

つぎにほそをを、ごくのしらべにて一ひき給ひに、いろいろにあらればしばしばふり、雲たちまちにいでき、ほしさはぎ、空のけしきおそろしげにはあらで、めづらかなる雲たちわたる。ひさしにみ給へる人々、せばくて人けにあつかはしくおほえ給へるたちまちにすずしく、心ちたのもしく、命のび、世中もめでたからんさかへをあつめて見きかんやうなり。

上記に上げた、「たちまちに」はどれも「とりあえず」と訳すことは難しく、「すぐに」「あつという間に」という意味ばかりである。このことから推測すると、「たちまち」+「に」となると平安時代であっても「たちまち」を「とりあえず」という意味で用いることはできないのだろう。

<まとめ>

「たちまち」という言葉は平安時代の時期には中央でも「すぐに」「突然」「あつという間に」「とりあえず」等たくさんの意味で使われていたのだろう。それが中央から地方に伝わり、今の広島県にも伝わり用いられるようになった。しかし、時代の流れとともに文化や生活等さまざまなことが変化していくうちに、中央では「たちまち」を主に「すぐに」「突然」等の意味では用いるが、「とりあえず」という意味では用いられなくなった。

だが、広島県の一部ではそのまま「とりあえず」という意味が残りそれが現在でも続いているのではないかと思う。おそらく、中央語の「たちまち」から「とりあえず」の意味がなくなったのは鎌倉・室町時代の時期ではないかと思う。実際に平安時代に書かれた『今昔物語』、『蜻蛉日記』、『落窪物語』、『狭衣物語』では「たちまち」を「とりあえず」という意味で用いられている部分が見られたが、それ以降の鎌倉時代、室町時代、江戸時代に書かれた『平家物語』、『御伽草子集』、『仮名草子』では「たちまち」を「とりあえず」という意味で用いられている例は見られなかった。また、主に室町時代に中央語で使われていた言葉の意味を調べることができる『日葡辞書』では「即時に」「すぐに」「即刻」「疑いなく」という意味は書かれていたが、どれも「とりあえず」という意味に類似しているものはない。また、「たちまち」+「に」というかたちになると、どの時代であっても「とりあえず」という意味で用いられていることはない。平安時代中期に書かれた『宇津保物語』ではたくさん「たちまちに」という言葉がでてくるが、どれも「とりあえず」という意味で用いられていない。実際に現在「たちまち」を「とりあえず」という意味で用いる広島県でも「とりあえず」という意味で用いる際に「たちまち」ではなく、「たちまちに」を用いることはない。今回調べていくうちに以上のことが分かった。しかし、なぜ中世になって中央語の「たちまち」から「とりあえず」という意味が消えたのか、中世にどのような変化が起こり、それが言語にどのような影響を及ぼしたのかまでは分からない。

<参考文献>

- ・蝸牛考 岩波文庫 解説 柴田武
- ・日本古典文学大系 90 仮名草子集 前田金五郎 森田武 校注 岩波書店刊行
- ・宇津保物語研究会編 宇津保物語 本文と索引 本文編 笠間書院 刊
- ・日本古典文学大系 33 平家物語 高木市之助 小澤正夫 渥美かをる 金田一春彦 校注 岩波書店刊行
- ・日本古典文学全集 平家物語二 校注・訳 市古貞次 小学館・刊

- ・佐伯梅友 伊牟田経文 編 改訂新版 かげろふ日記 総索引本文編 風間書房刊
- ・新編 日本古典文学全集 土佐日記・蜻蛉日記 校注・訳 菊地靖彦 木村正中 伊牟田経久 小学館
- ・日本古典文学大系 13 落窪物語 堤中納言物語 松尾聰 寺本直彦 校注 岩波書店刊行
- ・日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語 校注・訳 三谷栄一 稲賀敬一 小学館・刊
- ・日本古典文学大系 79 狭衣物語 三谷栄一 関根慶子 校注 岩波書店刊行
- ・新編日本古典文学全集 狭衣物語① 卷一～卷二 校注・訳 小町谷照彦 後藤祥子 小学館
- ・日本古典文学大系 38 御伽草子 市古貞次 校注 岩波書店刊行
- ・日本古典文学全集 御伽草子集 校注・訳 大島建彦 小学館・刊
- ・新日本古典文学大系 34 今昔物語集 二 小峯和明 校注 岩波書店刊行
- ・エヴォラ本 日葡辞書 [解説] 大塚光信 清文堂
- ・現代ポルトガル語辞典 [改訂版] 池上岑夫 他 共編 白水社
- ・上代語辞典編修委員会編 時代別国語大辞典 上代編 三省堂
- ・室町時代語辞典編修委員会編 時代別国語大辞典 室町時代編三 さ～ち 三省堂
- ・角川古語大辞典 第四卷 た～は 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤彦 編 角川書店